

島崎藤村の詩の工夫(三)

—構成を中心に—

橋口晋作

『夏草』には、十三連から成る詩が「晩春の別離」「暁の誕生」「終焉の夕」と三篇ある。「晩春の別離」は、四、六、十、八、十、十一、十五、四、十三、六、八、八と各連の行数の変化する詩である。この詩は、最初の二連と最後の二連に「高楼」での「君」との「別離」の宴が浮き彫りになっていて、それが一篇の枠を形作っている。この枠に挟まれている九連は、「君」の旅による芸術の完成・成就を祈念する内容となっているが、こゝは、前六連と後三連の二つから成っていると考える。前六連は、藤村の明治二十六年の関西漂泊に取材して「君」の行き先を次々と挙げて行き、「げに」で始まる第八連の芸術の完成を期待する言葉で結ばれる。これに対して、後三連は、かの古代ギリシアやバビロニアの芸術も衰えてしまったことを語る言葉で始まり、しかし、「げにや」で始まる第十一連で「大雅」を求める「君」の熱意に代えて道が示されるだろうと言祝いで終わる。このように枠内部九連は、前六連に、世界史という広大な視野に立つて後三連が畳みかけられるという形になっているのである。ところで、後三連の結び第十一連は「げにや」という言葉で始まっていて、前六連の結び第八連の第一行冒頭に対応していた。六行と比較的短い、この後三連の結びか

ら転じる外枠の最初の第十二連は「さらば」という言葉で始まっている。この「さらば」も、先の第八連の第四行末の「よしさらば」に対応するような響きがある。従って、一見すると、六行の第十一連と八行の第十二連の二連で十五行からなる前六連の結び第八連に対応するような外観があるが、内容上は第十二連から外枠に転じているという複雑な形になっているのである。「暁の誕生」と「終焉の夕」は、内容上一対を成す関係にあるが、形式も一連四行と同形になっている。「暁の誕生」は、「汝」が誕生する暁の空とそこに浮かぶ明星を詠じる二つの連で始まる。そして、黎明を告げる第三連を介して、生まれた「汝」の姿が四連に亘って描かれた後、第八連で「行く末」も「かゝるゆたけき朝のごと 心の空の静かなれ」という祈りの言葉で一旦結ばれる。次いで、この祈りを受ける感じで、「芸術の神」への願いが四連に亘って記されて行く。最後の二連は、冒頭部の世界に返るといった風で、この暁を祝おうという内容になっている。従って、「暁の誕生」も「晩春の別離」のように「暁のさま」や祝宴を記した前後の連が枠を作っているのであるが、「晩春の別離」とは対照的に前枠の方が枠内に流れて行く風になっている(前枠の連数もはつきりさせ難い)。「終焉の夕」は、死は手の施しようもないものだということを莊重に語る二連で始まる。次に第三連からの四連で、八月に「うらわかきたをやめ」が亡くなったことが告げられる。そして、第七連からの四連では、その「たをやめ」の死による変化を一つ一つ描き出している。最後の三連は、「たをやめ」の死の前後を巨視的に捉え、別世界に転じたことを告げて結ぶ。従って、最後の三連から又冒頭の二連に続いて行くような印象がある。この点も「暁の誕生」に近い。

『夏草』では、この三篇がこの順で冒頭に配され、「月光五首」に続いて行く。

明治三十二年

八月の『新小説』四年十巻に「新荷葉」詩群の中、「黄昏」「藪入」の二篇の詩が分載された。この詩群から第四詩文集『落梅集』の詩が本格的に始まる。二篇の中、「黄昏」は二連の詩であり、「藪入」は「上」「下」から成る詩である。二篇とも一連は四行である。また、どちらも二つの時間を取り上げている。「黄昏」の第一連は「夕雲」の頃、第二連は日が暮れた後である。「藪入」の「上」は藪入りの日の朝、「下」はその日の暮れを詠じたものである。「朝」「暮」から成る『若菜集』の「二つの声」を始めとして、藤村詩には時間で区切られた世界を詠じた詩がかなりある。この二篇は、この流れの同趣向の詩である。

さて、六連から成る「上」は、第一連で「こひしき家に帰る」ことが告げられ、次の二連で「空飛ぶ鳥に似」た思いが語られる。また、この中の第三連から最後の連までは隅田川に沿って帰って行く情景となっている。八連から成る「下」は、一日が暮れて、母に別れる第一連で始まる。そして、次の第二連からの四連では「吾宿の今のありさま」を思い浮かべて憂える様子が描かれる。最後の三連は、うきうきした気分の「上」と対照的に「心のさみしき」を抱きながら隅田川に沿って戻って行く情景となっている。心情と移動を絡ませながら、対照的な世界を描いた詩である。

『落梅集』に収める時、藤村は、この二篇はそのままの題名で、「黄昏」

を散文「雲」と「利根川だより」の間（中央部）の「恋の歌」の冒頭に、「藪入」を「利根川だより」の後の後半部、「響りんく音りんく望郷」と「鼠をあはれむ（鼠の歌）」の間に配した。

九月の『新小説』四年十一巻に「新荷葉」詩群の残り五篇が発表された。連数は「夏の日」が四連、「鼠の歌」と「離愁」が五連、「望郷」が六連、「鳥なき里」が七連となっている。また、「望郷」は八、四、十、六、十三、六と各連の行数の変化する詩となっているが、その他の四篇はいずれも一連四行の詩である。

四連から成る「夏の日」は、季節を提示した第一連と「恋の時」ということに関わる第二連以下の二つの部分に分けられるようである。第二連は、第一連に出てきた蝶が巡っていてという雰囲気があつて、うまく後半部が導かれている。

五連から成る詩「鼠の歌」・「離愁」は、共に三つの部分に分けられる。「鼠の歌」の場合は、最初の二連が鼠が出て来る時の辺りの静まりかえった様子、次の二連が鼠の動き、最後の一連が鼠の臆病振りとなっている。これに対して、「離愁」は、第一連の「こゝろをつなく銀の鎖」が絶えてしまったことで始まり、第五連で「永き別れ路見るよしもなし」と、また心の断絶に戻る。この間の三連は、心と心が絶えてしまった思いが過去へ、現在へ、未来へと馳せる形になっている。従つて、こちらは、前後の各一連とその間の三連の三つの部分ということになる。

六連から成る「望郷」は、四つの部分に分けられる。最初の二連は、「を

さなくて国を出」た時を回想しているところと見られる。ここに対応するのが、今故郷を振り捨てて出て行くとうとしている第六連である。第三、四連の二連は、二十年振りに帰って来た故郷がすっかり変わってしまったていることを記している。第五連は、これを受けて、「かゝる古里」は捨て、「心の宿」を広く求めていこうという決意を述べて、第六連に繋いでいる。

七連から成る「鳥なき里」は、三つの部分に分かれると見てよいだろうか。最初は冒頭の三連で、宗助・幸助が互いに相手の仕事を羨んでいたというところである。次は第四連からの三連で、二人が互いの仕事を取り替えてみたが、うまく行かず、夢破れてしまったところである。三つ目は第七連の一連で、二人が迷いに閉ざされたことを記して、詩は結ばれている。

右の五篇は、『落梅集』に収載される時、「望郷」が「響りんく音りんく」、「鼠の歌」が「鼠をあはれむ」、「夏の日」が「夏の夢」、「離愁」が「銀鎖」と四篇まで詩題が改められている。このようなことは、これまでになかった。配置は、「離愁（銀鎖）」「夏の日（夏の夢）」がこの順（初出とは逆）で中央部の「恋の歌」の末尾に置かれた。残りの三篇は、「鳥なき里」が後半部の末尾、「鼠の歌（鼠をあはれむ）」が間に一篇置いてその前、「望郷（響りんく音りんく）」が又間に一篇置いてその前といった具合になっている。

なお、「新荷葉」には「黄昏」・「藪入」・「鼠の歌」・「夏の日」・「鳥なき里」と、笹淵友一氏が『落梅集』の特徴として挙げられた「俳諧的自然観照詩」の殆どが入っている。

十二月発行の『伽羅文庫』一巻二号に長詩「寂寥」一篇を発表している。

この詩は九連から成っているが、各連の行数が十四、十八、十、二十二、十六、二十六、十八、八、九と変化している。この詩については、早く劍持武彦氏に「一連二連三連で信州の地の山と川を、四連でこれの内なる知恵の悲しみを、五連で俊成や芭蕉を、六連で屈原の憂悶とヨハネの勇気を、七連で日蓮の寂寥をとうたいつづけ」という指摘(注三)があった。冒頭の二連は、「写生的、叙景的な叙述」で全くの序となっている。そのような世界の続く第三連に初めて「寂寥」が点出され、第四連でそれが内面的、観念的に一気に深められて行く。第五連からの三連は俊成以下の詩人や宗教家を挙げて、作者の説く「寂寥」を具体化して証している風である。劍持氏の触れていない第八連は、それらの人々の世界から作者の世界へ返り、最後の第九連では「都」に言及して冒頭部（作者の居住地）に対応させている。このように、この詩は、途中から世界ががらりと変わるといふ新機軸の運びが試みられている。

「寂寥」は『落梅集』では、後半部にある「響りんく音りんく」の直前に配置された。

同じ十二月発行の『新小説』四年十四巻に文と長詩からなる「悪夢」を発表している。このような文の付いた作品を藤村は、『若菜集』と『夏草』にそれぞれ一篇ずつ収めていた。いずれも挽歌といった内容の詩であったが、この「悪夢」の場合は、「少年の昔よりかりそめに相知れるなにがし」に成り代わって詠んだものとなっている。一連四行、十七連の詩である。

また、「寂寥」までは七五調であったが、この詩は五七調に転じている。

詩は、「激り落つ愁」を訴える人がいないという孤独を告げる一連から始まる。そして、第二、三連は、一転して「われ」の「牢獄のなか」での生活が描き出されている。この二連に対応して、「牢獄のなか」に繋がれているという現実世界に戻ったのが末尾の四連であろう。この間の十連は、第四、五連の地獄の責め苦を語るところから、思いの赴くままに「罪」と孤独を語り続ける。現実の場面に戻った末尾の四連にも、この「罪」と孤独が深々と影を落として終わるのである。従って、この詩は、四部構成で、冒頭に主想を置き、第二部で現実の状態を示した後、十連から成る第三部で冒頭の主想を言葉を尽くして記し、最後でまた現実に戻るといふ形になっていると見られる。

「悪夢」は『落梅集』では、前半部の最後に配されている。

明治三十三年

一月の『新小説』五年二巻に「常盤樹」一篇を発表している。前年十一月の「労働雑詠」^(注四)以後、藤村は、各誌に一篇ずつ作品を発表している。しかし、「労働雑詠」は「其一 朝」・「其二 昼」・「其三 暮」の三つから成る詩であり、「寂寥」は異なる長さの九連から成る詩、「悪夢」は文と長詩から成る作品、そして、この「常盤樹」は五十八行の長い一連のみの詩と、それぞれに形式を異にしている。

「常盤樹」は、『落梅集』出版当時最も好評だったと伝えられている。土井晩翠の向こうを張ったような漢文訓読体で、一行の音数も変化し、「五七

調、七五調の外、七七、八七、五五、六五調など多様の格調を交錯して殆ど自由律に近い」と評されている。^(注五)『落梅集』では、後半部、「寂寥」の直前に配されている。

四月の『明星』創刊号に「旅情」一篇、『文界』創刊号に「一小吟」一篇と、この月は、二つの雑誌にそれほど長くない作品を一篇ずつ発表している。これは、三十二年十二月に『伽羅文庫』に「寂寥」を、『新小説』に「悪夢」を発表したのに続いて、それが長詩や文と詩から成る作品であったのに対して、これは、「旅情」が三連、一連六行、一行十二音、「一小吟」が四連、一連四行、一行十二音と、比較的短い詩となっているところが異なっている。『明星』・『文界』共に創刊号なので是非ということでは、主題、調子、場所の共通する作品をそれぞれに寄せることになったのであろうか。共に「千曲川」のほとりの旅情詩^(注六)であり、「沈痛な五七調で歌われている」。

「旅情」は、関良一氏の「全体が、『遊子』が古城のほとりから千曲川の岸に近い宿におもむくという筋をもった物語風の詩で、第一節は序、古城のほとりである。城を起点にして言えば近景である。(中略)第二節は、古城よりやや離れた畠中の風景である。小諸の町はずれから中棚鉱泉に行く道の途中の眺めと見なしてよいだろう。第三節は結び、主として川の岸に近い宿である。時刻は夕暮れである。」^(注七)という考察に従ってよかろう。

「一小吟」も、関氏に「想から景、想から景と展開している」という指摘^(注八)がある。従って、こちらは二連ずつの二部構成ということになるが、後半

が千曲川という名前を出して、当地に密着した作品世界としている。

『落梅集』では、「旅情」が「小諸なる 古城のほとり」と改められて巻頭に、「一小吟」も「千曲川旅情の歌」と改められ、こちらは、後半、初出「海草」詩群の最後「船路」と「常盤樹」との間にそれぞれ据えられた。

七月の『今世少年』に「面」という童謡を発表している。また、『落梅集』には、「海辺の曲」という初出未詳の歌詞がある。しかし、いずれも本稿で取り上げて来た作品とは性格を異にするので、割愛したい。

纏めに代えて

本稿冒頭（注九）に記したように藤村の叙情詩の制作状況は、発表されたものを見るしかないのだが、それによると、七月、夏が創作活動に深く関係していたように見える。彼の最初の叙情詩「蟬」が発表されたのが二十七年の『文学界』七月号であった。その次の作品が同誌の二十八年七月号に発表された「ことしの夏」詩群であった。そして、藤村の第三詩集が『なつくさ（夏草）』である。藤村という直ぐに春という季節が浮かんでくるが、これは『若菜集』の印象が強いからなのであろう。藤村は、春よりも夏に深い関わりがある、あるいは、春とか夏とかいう季節に関わりの深い詩人と見るべきではなからうか。

藤村の叙情詩の最初の作品「蟬」は、繰り返しに近い連の間に対句を挿入するという方法で、三部構成に組み立てられていた。また、最初の連と最後の連で時間の経過を示すという工夫が、同時に凝らされていた。この

ような詩の成り立ちから、筆者は、藤村が繰り返し、対句、対照、構成といったことに叙情詩創作の活路の一面を見出していたのではないかと考えたのである。

二番目の「ことしの夏」詩群は九篇の詩から成っていた。一連だけの詩が四篇、二連の詩が二篇、三連の詩が二篇、二十連の詩が一篇である。この詩群で行を字下げするという工夫が始まっている。三連から成る二篇は、客観的な説明部と主情的な部分からそれぞれに成っていて、構成の方法が「蟬」程単純ではなくなっている。しかし、その部の一方には、季節の違い、客観・主観の違いがはっきりと示されていて、「蟬」に近い工夫も認められる。長詩「与作の馬」は、二、三連を小さな纏まりとする物語詩である。説明の連もあり、作者の描きたいところは長く続いているなど、散文の技法を取り入れた構成ということになるうか。藤村の詩を作る技法は、この詩群で殆ど出そろったという観があるが、連続して詩が発表されるまでには、更に一年の月日を要した。

二十九年九月の「草影虫語」詩群から『若菜集』の詩が『文学界』に月を追って発表されてゆく。「草影虫語」は五篇の詩と二篇の短歌体の作品から成っていた。詩は、全て二連以下である。従って、この詩群では、本格的な活動の始まりという印象は未だそれ程強くない。しかし、十月の「一葉舟」詩群の豊饒がこれに続き、本格的詩作となつて行つたのである。筆者は、「一葉舟」詩群こそ本格的制作活動の始まりと見ている。藤村が第二詩文集にこの詩群の総題を取つたのは、この豊饒さに肖ろうとしたのではないかとも思うのである。

藤村の詩作活動は、別稿「島崎藤村の番号の付いた詩とその構成―この形式の詩の流れと構成―」^(注一〇)で取り上げた三十三年六月の「海草」詩群で終わっている。筆者は、別稿を含む一連の拙稿で連の組み立てられ方に絞って、その構成を考察して来たのであるが、その全体の整理はまた後日を期したい。

(注一) 『『文学界』とその時代』(昭和三五年一月)の第七章「島崎藤村」の第十一節「落梅集」七から。

(注二) 日本近代文学大系15『藤村詩集』(昭和四六年二月)所収「落梅集」の頭注から。

(注三) (注二)の補注から。

(注四) この詩については、拙稿「島崎藤村の対話・劇等の形式の詩の構成と内容―『若菜集』以後の詩について―」(『鹿児島県立短期大学紀要』人文・社会科学篇 平成一六年二月)で取り上げている。

(注五) (注二)の「落梅集」三から。

(注六) (注三)に同じ。

(注七) 『千曲川旅情の歌』講義(『考証と試論 島崎藤村』昭和五九年一月)から。

(注八) 『千曲川旅情の歌』国語教室のために(注七に同じ)から。

(注九) この「本稿冒頭」は、『人文』第二十八号(平成十六年八月)に掲載した「二」の冒頭である。

(注一〇) 『鹿児島県立短期大学紀要』人文・社会科学篇(平成一七年二月)。